季節のお便り Vol.1

橋本絵莉子 波多野裕文

音楽について、いま思うこと

橋本絵莉子

私の音楽への入口はいつも、「憧れ」からだった。

6歳でピアノを始めた時の憧れは、近所の友だちAちゃん。長い髪をピンクのボンボンで結んだ明るく活発なAちゃんの小さい手がひらひらと繊細に動いて聴かせてくれたメロディーを、今でも覚えている。私もやりたい、私もピアノ弾きたいと、ピアノを始めた。

いざピアノを始めてみると、なかなか弾けないもどかしさで鍵盤をバンバン叩いてみたり、ろくに練習もせずに教室へ行ったりと、思い描いていたようなピアノ生活はできなかった。ただ楽譜は読めるようになったので、音楽の成績は良く、今現在の私にも役立っているので、習わせてもらえて良かったなと思う。

中学でクラリネットを始めた時の憧れは、新入生歓迎会での吹奏楽部の演奏。指揮者に一番近いパイプ椅子に並んで座り、指揮者を見つめるその目つきに釘づけになった。指揮者を信頼しきっているその目つきに。私もやりたい、クラリネットを始めた。

それと同時に、部活の仲間ができた。厳しめの吹奏楽部だったので、走って階段を上がらなければいけなくて足が震えた時も、重いティンパニを2人で運ばなければいけなくて手が震えた時も、先輩に怒られて心が痺れた時も、こっそり目を合わせれば笑える仲間ができて嬉しかった。

クラリネットも楽しかった。とくに初見で、パッと楽譜を見てすぐ音を合わせるのが得意だった。中学3年生になると、クラリネットチームのリーダーに選ばれた。リーダーができるような性格ではなかったので、何でもゆるしてしまうリーダーだったと思う。中学卒業間近には、通常のクラリネットよりも4度音が高いエスクラリネットを吹くようになった。音が高い分、うるさくならないように丸い音が出るように努めた。この吹奏楽部での3年間は、一学年ごとに変わるクラスより濃い時間を過ごしたと思う。

高校入学と同時に始めた歌とギターの憧れは、挙げたらきりがない。兄のバンドのライブを観に行ったその日から、楽譜の存在する音楽ばかり演奏していた私は、楽譜のない「オリジナル」というなんとも自由な響きの世界に夢中になった。私もバンドやりたい、オリジナルを作りたいと、ハイスタのコピーを1曲してすぐオリジナルを作り始めた。

親は良い顔しなかった。当たり前だと今なら思える。あんなに部活に真面目だった女の子が、ギターを持って出かけるとなかなか帰ってこなくなったのだから。成績もどんどん右肩下がり。あまりの成績の下がりっぷりに、夜のファミレスでこんこんと叱られた。幸い、タバコや金髪やピアス…には全く興味がなく、ただ近くのスタジオでオリジナル曲を作って、ギターを弾いて、歌っていた。

そんな具合でギターを始めたので、ピアノやクラリネットと違って、今でも基礎的なことは詳しくない。わからないコードもたくさんある。得意だった楽譜の初見も、ギターでは全くできない。私がギターに求めていたものは、歪んだ音だったから。あとはベースとドラムがいれば、別に何も気にならなかった。

学校の外の世界に、バンドの知り合いもたくさんできた。女の子のバンドマンというだけで、大切にしてくれた。それはもう、自分の実力を勘違いしてしまう程に。高校卒業間近、プロのミュージシャンになりたいと言った私に、父はこう言った。

「そこまで音楽しかやってなくて、他に何やるん。」

その頃の私は、自分の作る曲より良い曲なんてないという、相当な思い込みを持っていた。今思えば、その思い込みがなければ、音楽で食べていくことはできなかったと思う。2005年にチャットモンチーとしてデビューするまで、その思い込みは続いた。続いてくれて良かった。

デビューしてからは、自分たちの信じているオリジナルを汚さないように、そして、自分たちにもチャレンジできそうなものは取り入れつつ、進んだ。同期バンドのエネルギーに負けないように。先輩バンドに憧れながら。

デビューでもしなければ、東京へ来ることもなかったと思う。上京してからも何回か引っ越しをしたけれど、自分の荷物を置いてしまえばもう、すぐ自分の部屋になったし、デビューしてからというもの、東京の慌ただしさに寄り添うように、ずっと忙しかった。

チャットモンチーの名前も、えっちゃんというキャラクターも、なんとなく慣れてもらえて、分かってもらえて、自分でも少しずつ客観視できるようになってきた頃、結婚して、それからしばらくして、子どもを産んだ。音楽に憧れ続けてきて、初めて、音楽をストップした。その時の私は、これからの生活への期待と同時に、子どもを産む前と産んだ後の差をどうにか少なくしなければと焦っていた。ちゃんと産む前のえっちゃんに戻れるだろうかと、産む前のえっちゃんの動画を定期的に観て勉強した。歌い方、弾き方、笑い方。憧れるように観た。でもある日、何してるんだろうと思った。私は誰なん。

子どもはすごい。私の中の全てを独り占めしていく。それは授乳から始まり、育児にまつわるエネルギーや、愛情や、欲や、時間までも。

産む前のえっちゃんには戻れなかった。だけどそれは、前に進んだということだし、当たり前のこと。産後すぐくらいのインタビューでは自分で、「特に何も変わらないですね。」と嘘をついてしまったけれど。

復帰初のロック・イン・ジャパンで恋愛スピリッツを演奏した時に、デビューからよく知る人に、「歌にリアリティがなくなった」と言われたことが、ずっと忘れられない。

いつも憧れ続けてきた音楽。

私もやってみたいと思わせてくれる音楽。

仕事になってもう10年以上たったけれど、私の心はずっと音楽に憧れ続けたがっている。音楽には、ずっと憧れの存在でいてほしい。嬉しいことに、この世の中には、まだまだ私の知らない音楽の世界がある。いろんな角度から見えるようになっているはずだ。

そこに気付きながら歌える私は、幸せ者だと思う。

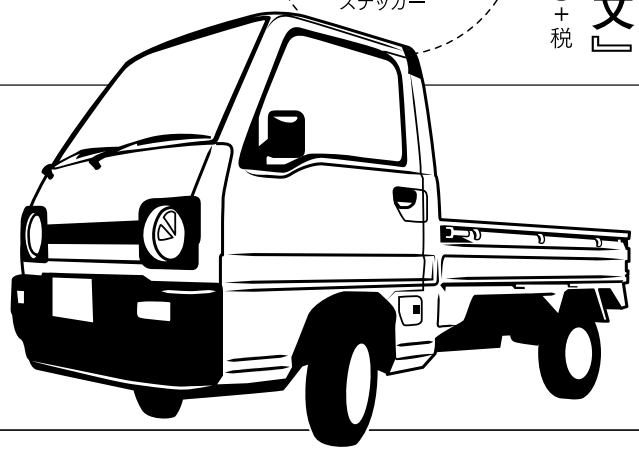
橋本絵莉子

本子野文
莉多
橋絵波裕

ファーストアルバム
『橋本絵莉子波多野裕文』
KSCL 2950　¥2,800＋税

〈収録曲〉
1. 作り方 [1:24]
2. 飛翔 [5:00]
3. 幸男 [5:24]
4. ノウハウ [3:44]
5. トークトーク [4:20]
6. 流行語大賞 [3:25]
7. アメリカンヴィンテージ [6:10]
8. 君サイドから [5:34]
9. 臨時ダイヤ [5:11]

初回仕様限定盤
① デジパック仕様
② 波多野語録
③ やばいおじさん ステッカー



1st Album
2017年6月21日発売

www.yabaiojisan.com

Kioon
NOT FOR SALE